乙女すゝき

何百年もの昔、井泉に大房寺というお寺がありました。利根川の氾濫で、きれいに押し流されて跡かたもなくなりましたが、四十町歩もの境内には梵天川があり、いかにも三途の川と思える梵天川の水の流れと、うつ蒼たる樹木に日中でさえ身がしまるようです。その大房寺の住職は、行田城主の側室が城主の御子を妊り女児（双生児）を出産しました。側室は大変恥らって、二人のいとし子を連れ、出家し、静かに仏道につとめ、やがて大房寺の住職として、つゝましく、そのつとめに専念しました。

月の冴えた十三夜の晩、静御前が義経を慕って奥州に向う途中、羽生を通り　一日を大房寺でくつろぎました。翌日別れを告げ旅立ちしようとした時、大房寺の二人の娘は御前の気持ちを察し「せめて栗橋までお送り申し上げましょう」と、やさしく言葉をかけると、御前は暖かい心に感動し、こみあげる目がしらを押さえ深々と頭を下げました。

樋遣川の卯の森までくると、突然人影が飛び出しおそいかゝってきました。大房寺の娘二人は必死に御前をかばいとうとう殺されてしまいました。

その年の秋も深まり卯の森のすゝきの尾花も夕日に映えて一段と美しく見えました。よく見るとどうでしょうか。一本のすゝきに二つの尾花がついているではありませんか。きっと殺された二人の娘が尾花になって、仲よくむつまじく咲くようになったのでしょう。

それを知った人々は、乙女すゝきと言い、その物語りをあわれみ、すゝきの穂の美しい秋の頃の今では語り草になりました。